

創立 40 周年記念誌より <東京湾横断遠泳の創始>

昭和 7 年卒業生 菅谷 操 様

私が卒業したのは昭和 7 年ですから、早 30 年余りになります。京商時代より水泳に親しみ、今日にいたっていますが、母校が千葉県岩井町に経費一万円の予算をもって、200 名あまり収容できる理想的な大臨海施設が建設されたのも昭和 7 年の事でした。以来今日に至るまで、全校皆泳の精神をもって、水泳京商健児が、この理想郷で生まれたのです。この間、宿舍設立後間もない昭和 9 年には、京商健児の東京湾横断遠泳が行われました。この成功は今日に至るまで本校の特筆すべき一大事であり、また本校の誇りとすべき一大快挙です。大正 13 年横須賀海兵団で決行して以来、正確な記録をもたぬ、いわば処女海征服にも等しいものでした。

この計画は、はじめ当時の水泳部長桑原教頭によって発案され、日本遊泳術研究会に委嘱されたものです。いわゆる力試しの大会でした。計画に当たり横須賀海兵団に照会し当時の体育主任高島少佐の御協力を得て、実地踏査の上安全性を考慮し決行いたしました。距離は神奈川県久里浜と千葉県浜金谷間横断直線コース 11,500m、一時間の泳速 2,000m とし、特に潮流を考慮して、目標・コースを決定したものです。

この快挙は、昭和 9 年 8 月 4 日に行われましたが、桑原教頭はこれより先 7 月 31 日に横須賀に赴き、高島少佐に面接して前回の経験並びに各種の注意事項を打合せ、更に出発地点の久里浜海岸に行き、地形潮流を研究踏査、宿舍を決めて岩井に帰ってきました。8 月 2 日には日泳会指導員の高関・氏家両先生、遠泳参加者 8 名と私たちが発動船舶に乗って久里浜に行き、浜金谷までのコースを予行演習を行いました。当日は天気快晴、無風状態で東京湾城を泳ぎながら輪を描く魚の群れを眺めて成功疑いなしの感を得たものです。開けて 8 月 3 日、桑原教頭は参加者 8 名を引率して久里浜に向かい、潮流を研究し自信を深めました。

昭和 9 年 8 月 4 日は南の風快晴で潮流は長潮でした。全コースにおける水温は最低 23℃、最

低 28℃。本校生徒の参加者は倉沢新蔵、関根政二、海野武義、中村三代太郎、千葉初巳、堀田寛、江崎一哉、山上明方の 8 名。また日泳会より 2 名参加、本校卒業生として平島直一郎、川田清、影山親雄、風間長輔と私の総勢 17 名でした。監督戦は発動機船 2 隻、和船 2 隻、他に連絡用として会則モーターボートの合計 5 隻。これに学校職員、日泳会加藤、氏家他 6 名の指導員が分譲し、平野師範、手島、菅谷はもっぱら水中監視の任に当たりました。

参加者は前日久里浜に一泊し、夕刻過ぎに調整を行って午後 8 時に就寝しました。当日は、午前 5 時半起床、6 時半に食事をして、ウォーミングアップの後、浜辺で軽いジョギングを行いました。各新聞社のフラッシュを浴びながら、記念撮影の後出発。8 時 55 分に久里浜ペリー上陸地点より 400m の沖にて入水、二列縦隊で目標を浮島左方向突端に定めました。遠泳開始後まもなく、アジカ灯台付近の逆潮がものすごく強く、進路をやや右方向に変えました。午前 10 時 45 分江崎、11 時千葉ともにけいれんにて遠泳を断念。11 時 10 分には氷砂糖の配給を行いました。この頃から水温、疲労のためけいれんを起こすものが続出しましたが、直ちに回復して遠泳を続行しました。また潮により目を傷める者や、舌が荒れて味覚を失うものもいました。正午に粥の配給を実施。この頃から隊列も乱れがちとなり、前後の感覚が 500m 以上離れながらもよく頑張り、半ば意識を失いつつも指導員よりの激励のたびに意識を取り戻し、一掻き一掻き前進し、精神力のみでの力泳でした。午後 2 時 10 分、金谷荒崎海岸に到着しました。完泳者は倉沢、関根、中村、堀田、山上、海野の 6 名。所要時間は 5 時間 20 分でした。

ここに集いし精鋭の京商健児は、見事東京湾横断遠泳に成功し、(観衆による)万歳の声は鋸山山麓にこだましました。岩井の寮には東京から太神楽を招いて、盛大に祝賀の宴が開催されたのは言うまでもないことです。